



作／つかこうへい
構成・演出／中島諒人

戦争で 死ねなかつた お父さんの ために

この上演は、昭和 50 年くらいに東京あたりの大学の演劇部が部室の中で読み合わせをするという劇中劇の形をとっている。こうしたのには理由がある。この戯曲は 1971 年ごろに発表され、東京・六本木の小劇場で初演された。若者が彼らの親世代の戦争体験を冷笑的に見つめる形で進むこの作品は、当時の大学生を中心とした若者世代が演じ／観るといういわば閉じられた場の中で生まれた。その特殊な閉鎖性を意識することが、この戯曲を今味わうためには必要なことだと思う。

もう一つ意識したのは、笑い。若者たちは大笑いしながらこの上演を観た。下品だったり不道徳とも思える台詞の洪水に観客は笑いで応えた。一般社会では言うてはいけないことを大胆に誇張して語ることから生まれる「笑い」が力となって、つかの芝居はこの後に続く「熱海殺人事件」などを通じて多くの観客を獲得していく。その初期の客席の様子を想像してもらえよう、基本的にいつも誰かが演劇の出来事を観ていることにした。

それにしても、なぜ戦争をネタにして笑う必要があったのだろうか。「戦争は大変だった、お前たちはどんなにお気楽な世界に住んでいるか、そのことに感謝せよ」と説教する親への反発はわかる。しかし、「天皇陛下万歳」というセリフで終わり、存在しない満州に出兵するというほとんどタブーのような物語が、なぜ若者の笑いを呼ぶことができたのだろうか。満州はギャグの細部（おまけ）に過ぎず、他のところでみんな盛り上がったのだという考えもあるかもしれない。けれどそんなに単純なことだったのだろうか。笑い転げる若者たちは、奇怪な物語のむこうの何かに無意識のうちに共感したのではないか。消費の時代を迎えようとする戦後 30 年の社会で、全く姿を消したかに見える戦争は何らかの形で社会に圧力を与え続けていたのではないか。そのあたりのことがどうにも気になっている。そしてそのあたりに、現代とこの芝居の接点があると見立てている。

(演出家 中島諒人)

キャスト

部長(岡山八太郎)	… 齊藤頼陽
副部長(山崎署長)	… 村上厚二
りな(女学生/兵隊/ラバウル島の娘/甲)	… 中川玲奈
しほ(女学生/兵隊/馬賊の娘/寒太郎)	… 後藤詩織
かきもと(熊田局長)	… 中垣直久
まな(女学生/兵隊/香港の娘/乙)	… 安田茉耶
守衛	… 高橋等

スタッフ

舞台美術：中島諒人
舞台監督：大野英寿
照明デザイン：大迫浩二
照明操作：久松夕香
音響：原伸弘(オハラ企画)
大道具製作：赤羽三郎 大野英寿
衣装：安田茉耶
英語字幕翻訳：増川智子
字幕製作/操作：増川智子
ライブ配信統括：服部かつゆき
ライブ配信：鳥の劇場
制作：鳥の劇場



<2020年度 小鳥の学校 発表公演のお知らせ>

小鳥の学校は、自分で考える、行動する子どもを目指す創造的な学びと成長の場です。
今年度の参加者は小学5年生から中学3年生の19名。自分たちで公演をつくりあげます。

小鳥の学校 発表公演『人魚姫』

2021年3月20日(土・祝) 16:00開演、21日(日) 14:00開演

ご予約は
3月8日(月)より
受け付けます。

主催:特定非営利活動法人鳥の劇場

後援:鳥取県 鳥取市 鳥取県教育委員会 鳥取市教育委員会 NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会

鳥取大学地域学部附属芸術文化センター 新日本海新聞社 株式会社ふるさと鹿野

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人ごうぎん鳥取文化振興財団


Mécénat
企業メセナ協議会
助成認定活動